

平城京でみつかった新羅の土器

新羅からはるばる海をこえてやってきた土器が、平城京の発掘でごくたまにみつかります。大多数は、日本の須恵器によく似た青灰色の硬い焼きの土器（陶質土器）です。新羅の土器には、このほか、緑色のうわぐすりをかけた、やや軟らかい焼きの土器（緑釉土器）があります。平城京でみつかった新羅の緑釉土器は、いまのところ1点だけです。新羅土器には表面をいろいろなスタンプ文で飾るのが特色です。文様で飾ることがほとんどない奈良の都の土器とくらべると大変にぎやかな土器です。

（企画調整部 千田剛道）



陶質土器：壺の口から頸にかけてのかけら。口の下の頸に当たる部分に「回」状のスタンプ文がめぐります。平城宮内裏東外郭を流れる基幹排水路から出土。



陶質土器：壺の肩の部分。櫛の歯を横にずらしながらつけた文様のあいだに、ぶどうの房がたれさがったようなスタンプ文が飾られています。平城京左京九条三坊の宅地から出土。



緑釉土器：壺の肩の部分。四弁の花文様や、紡錘形をしたスタンプ文をならべています。白っぽい地肌に濃い緑色の釉をかけて焼いています。平城宮東院石組溝から出土。



新羅の土器：にぎやかなスタンプ文で飾られています。